

※昨日は突然休刊して、ゴメンナサイ

遠野まごころネット：個人参加ボランティアニュース

2011.6.29(水)

よりそう

Side by Side



第50号

編集責任 進谷

編集担当者 市川、進谷

TVのフィルターを外して

6月24日、遠野に早朝に到着した私は、そのままボランティア活動に参加した。その日、私は初めて被災地に足を踏み入れた。

最初に捉えた風景

雨が降る中、遠野を囲む山々を越えて津波の被害を受けた岩手沿岸部へ向かう。六月の東北の、新緑の景色の中を車で一時間、やがて山裾へと入った。被災した釜石市である。しかし、津波が届かなかったこの地域は、ごく穏やかな光景が広がっているように見えた。

市街地の中心にある釜石駅を通り過ぎる。地震で傷んだところを補修しているのか、駅舎にはシートが張られていた。駅前の信号は沈黙していて、代わりに警官が一人立っている。駅の向かい側には新日鉄がある。製鉄所の巨大な建物のわきに、積み上げられた瓦礫があった。

商店街に入った。アーケードのある地方都市の商店街に、人影があまりない。連なる店のシャッターはへし曲がり、あるいは津波にもぎとられていた。シャッターの隙間から見える店内は、どこも暗い。ほとんどの商店のシャッターには×印が付いている。取り壊しを求めるマークだ。ときどき現れる空地には瓦礫だけがあった。冷蔵庫、布団、机、折れ曲がった金属の棒、野球ボール。人間の生活の瓦礫。

想像すらできない以前の姿

市街地からさらに奥へと進む。瓦礫だらけの低地の中で、三階建てのビルが三棟並んでいるのが見えた。どれも三階部分まで窓ガラスが割れている。大きく口を開けた空間を漂う暗闇がとても空虚に見えた。車が一台、三階の一室に前から突き刺さっている。ビルの周りには、それと同じくらいの高さまで瓦礫が積み上げられていた。

やがて目的地の箱崎に着いた。「集落があった」

と聞いたが、今はない。海に接した平地の中に、廃墟となったコンクリートの建物が二棟建っている。あとは、背後に迫る山の裾野に数棟の家が残っているだけだった。どれも、一階部分は津波の爪痕が窺える。それでもいくらかの人が戻っているらしい。生活に必要なものはほとんどないのに。

その光景からは、多くの人がいた町の姿なんて想像できない。だから、彼らの喪失感も分かるわけがなかった。ただ、その土地を漂う大きな欠落を感じる事ができるだけだ。

支援の一環で飾られた多くのこいのぼりが、風の中でだらりと垂れさがっていた。

再建される世界

この日は用水路の瓦礫を取り除く作業をした。泥は水路の片側に積み上げた。瓦、網、アスファルトやコンクリートの破片、草刈り機の刃、弁当箱。誰かが使っていたものが無数に転がっている。ただ、そこに生の気配はなかった。ヘルメットやマスクのゴムが締め付ける。ゴーグルは微妙に視界を歪める。汗で服は内側から濡れていた。黙々と、箱崎の人たちのものをゴミとして放っていく。

やがて空がいくらか明るくなり、雨があがった。辺りに澄んだ空気が広がり、風がそよぎ始めた。こいのぼりが弱々しく空を泳ぐ。地面に近いところにある視界が、野花の咲いているのを捉えた。アリが食べ物を求め、セキレイやすずめが飛び回っている。コンクリートの廃墟にツバメが入っていくのが見えた。覗いてみるとツバメが子育てをしていた。持たざる者から生の世界を築き始めていた。でも、私たちは多くを持たなければ生きられない。たぶん、私たちが世界を再建するためには、瓦礫を放るように、まずは過去を隅に追いやる必要があるのだと感じた。(京都・市川)

6/30(木) 天気 曇

気温 20℃ ~ 27℃

降水確率 ?

※月曜・木曜は休刊日になります。

まごころ種 募集

くわしくはHPへ

6/30(木)ボランティアミーティングはPM15:30~@体育館

6/29(水)の宿泊:115人、活動: ? 人

～注意事項～

・年には名前を書き、畳んで傘入れに入れてください。ペットボトルはつぶしてゴミ箱へ